

2016 年度 湘南藤沢学会「研究助成基金」成果報告書

慶應義塾大学
総合政策学部 2 年
石井大智

■ 研究名称と研究のフィールド

名称：シンガポールでの「大学の国際化」と

アントレプレナーシップの関係性についてのフィールドワーク

フィールド：シンガポール国立大学 (NUS)

■ 活動内容

ASEAN 諸国を中心に、アジア圏の多くのトップ大学がアントレプレナーシップ育成に力を入れている。公的な費用によって運営される大学にとって、自身がどのような価値をより直接的に社会に対して生み出せるかというのは自身の存立基盤に関わる重要な問題である。したがって、変化が激しいとみなされる時代において、世界の最先端を追求する場であるべき大学が、どれだけイノベーションを起こせるかが注目されている。どれだけ新たなビジネスや事業を生み出す人間や技術を育てるのかというのが大学の競争力を決める一つの要素となっており、各大学はアントレプレナーシップ育成に力を入れてきた。

またこのアントレプレナーシップ育成は大学のグローバル化と切り離せない関係にある。世界の最先端を追求するということは必然的に国境に縛られず人材を受け入れる必要がある。またイノベーションは均質的環境では起きにくいため、大学自体の多様性を増させる必要がある。このことも大学が国内外から多様な人材を受け入れるインセンティブとなり得る。

しかしながら、この両者の施策の連携がうまくいっている日本国内の大学は少ない。アントレプレナー育成と国際化が比較的進んでいる SFC できえも、それぞれを別個に切り離してしまい、相互の施策連携がうまくいっているとは言い難い。

本調査活動では、アントレプレナーシップ育成施策と大学の国際化の関係性や効果的な施策について、NUS を事例として取り上げる。具体的には NUS アントレプレナーソサエティ (NES) の主催するカンファレンスに 1 月 3 日から

7日の間参加。大学の国際化とアントレプレナーシップ育成が相互にどのような影響を与えているのか調査し、SFCなど日本の大学の現状と比較した。

■ 活動の成果とその活用

カンファレンス中にはNUSのアントレプレナー育成の試みについて触れる機会が多くあった。NUSはハード面、ソフト面双方でアントレプレナーを支援している。ハード面では大規模なオフィス提供だ。キャンパス内にシェアオフィスやワーキングスペースを作るだけでなく、キャンパス外のビルを改装して大規模なスタートアップ集合オフィスを大学自らがデザインしている。またソフト面で見ると、学内でのアントレプレナー向けイベントやNUSの学生が海外でスタートアップに関わることのできるプログラムが充実。学生が起業に関心を持ちやすいシステム作りをすすめるのはもちろん、大学自体がスタートアップの生態系(ecosystem)の中心となっている。

NUSはこのエコシステムの中心になることで、大学の国際競争力のさらなる向上をはかろうとしている。エコシステムの中心(hub)になれば、最先端の技術や知見が大学に流れてくることになり、それに引きつけられるように海外の学生・研究者・企業の注目も集まるようになる。その試みの一つに当たるものが、筆者が参加したカンファレンスで、世界中からスタートアップの経営者や学生が集っていた。したがって、アントレプレナーシップ育成と大学の国際化はやはり密接なつながりがあると言える。

しかしシンガポールで見られるスタートアップはいわゆるテックスタートアップ(アプリ開発など)が多く、大学の研究を活かしたものは全体の割合から見ると少ない。それに対し、日本の大学はプロダクトにできていない研究成果が文理ともに多い。大学の研究を活用したスタートアップに関しては他の分野に比べればNUSもそこまで取り組んでいるわけではなく、日本の大学はそこにチャンスを見出すべきだろう。

大学の研究を活用したスタートアップ育成は、大学の研究レベルの向上とその研究のアウトプットの手法にかかっているため、国内外から様々な分野の優秀な人材を獲得する必要がある。もし日本がそこにチャンスを見出すなら大学の国際化はより重要なテーマとなるだろう。このような観点で筆者は今後ともアントレプレナーシップと大学の国際化の関係性について研究していきたい。